

継続

プロジェクトの自主財源を生み出すマーケット体験学習 — 持続可能な少数民族未就学児童のモスン教育 —

2年間のモスン教育事業（ひろしま祈りの石国際教育交流財団助成）は、この3月に終了しました。画一的教育のなかで中退者が増えていく問題に対して、英語と民族の言語併記のテキスト作りや実践を重視したフリースクールに、解決の糸口をみつめようというプロジェクトでした。

試行錯誤の中で進められている本事業に、ゴールはまだ見えません。2月の報告にも、働いて現金を得るため黙って町に出てしまった児童の話がありました。今手に入るベビーシッター給料の月額750ペリ（1500円）より、将来のサバイバルに備えて一緒に学ぼう、という教師（Wogu 姉という意味）の説得に応じて戻ってきたそうです。

今年度は、父母、子どもたちの自主参加を裏で支える6名の教師（Wogu）の給与補填を中心に、（財）新潟県国際交流協会（NIA）の助成金により継続実施します。



収穫したイエローコーンとホワイトコーンを量り売りするモスン教室の子どもたち。鶏、アヒル、各種野菜の販売は、今後のモスン事業継続の鍵を握るもので、マーケティングの体験学習を兼ねています。

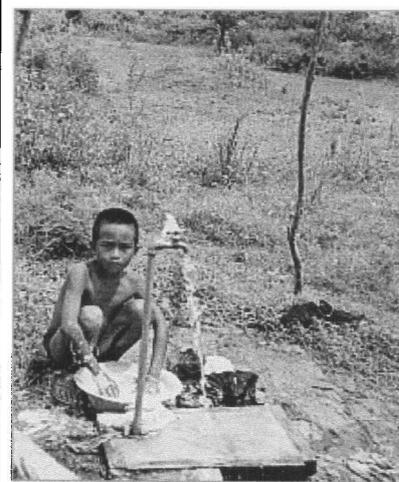
ブラクール近況

水道補修と学校運営自主財源 —アバカ・ヤギ・果樹—

ブラクールでは小学校および周辺住民が利用していた水道の水漏れがひどくなり、大規模補修が必要となりました。

そのため2003年の理科実験室と同様、2004年のクリスマスプレゼントは、学校施設の改善になりました。これまで、キアミやトゥランボンなどCMB簡易水道建設を支援してくれた市民団体ICECK（鎌ヶ谷市）の協力もいただき、合計10万円で大規模改修が実現しました。

ブラクール小学校は住民自治会が運営をする学校と農園からなり、将来はヤギや果樹、アバカからの収入でその運営費の半分を賄う予定です。昨年度の収入は、コーン・根菜類12,000円、コーヒーとアバカ9,400円、雄ヤギ販売（3匹）6,400円でした。この水道補修で乾季の水遣りが可能になり、果樹苗も順調に育つと期待されます。果実販売収入は最大の自主財源と考えられています。



改修が済み、たっぷりの水で洗濯する子ども（ブラクール村）

あしなが奨学金で育ったブラクール小学校の教師たち

以前のFOT会員支援で巣立ったブラクール出身奨学生は7名。近況をPFPのロニーさんに聞きました。

Denia Kulat	ブラクール小学校教師	教育だけでなく、アバカや果樹苗の世話、ヤギ飼育の指導を、ブラクール自治会役員と協力して行っている。 給与はHANDSブラクール支援金から支給されている。
Leonita Tilok	ブラクール小学校教師	
James Sulan	ブラクール小学校教師・農業指導者	
Bonel Bago	ブラクール小学校教師・農業指導者	
Enrilo Simson	ブラクール小学校教師	
Ernesto Yaten	大学卒業後教師になったが、2003年交通事故で死亡。	
Elena Dinyan	助産師兼ヘルスワーカーだったが、転居のため離任。	